新しい庭は人間なしでつくられるのか

——ジル・クレマンの庭とその思考——

山内 朋樹

はじめに——世界の庭園化に抗して

「新しい庭は人間なしでつくられるのか」。現代のフランスを代表する庭師のひとりであるジル・クレマン（Gilles Clément: 1943-）は、その主著、『動いている庭』の序論のなかでこう問いかける[1]。しかしながらこの問いは、一見して分かるとおりあまりにも矛盾に満ちているだろう。というのも、庭とは人為的につくられた空間に与えられる名前なのだから、人間なしでつくられることなど考えられないからだ。人間ではないとすれば、誰が庭をつくるというのか。この奇妙な問いかけは極端なかたちではあれ、庭園史のなかでクレマンの庭とその思考が持つ特異な位置を表明している。その意図を汲みとるならば、クレマンにとって、これまでの庭はあまりに人間によってつくられてきたのである。

広大な芝地にそびえる島のような高台は、フランス北部の都市、リール中心部に位置する《アンリ・マティス公園（Parc Henri-Matisse）》の主景である【図 1】。この公園はクレマンが全体を設計し、1990 年から 1995 年にかけてつくられた。リール中心部は当時、EU 統一市場の形成、イギリス—フランス間のトンネル開通、TGV 国際線の乗り入れなどを背景とした再開発が相次ぎ、そのマスタープランはレム・コールハースが手掛けている。この再開発の中心地に広がっている公園は、旧市街地と新市街地、国内線のリール・フランドル駅と国際線のリール・ヨーロッパ駅とを結ぶ都市の結節点に残された約 8ha の土地につくられており、周辺にはクレディ・リヨネタワーをはじめとするガラス貼りの現代建築群が乱立している。

さて、この写真はそれらの要所を結んでいる道路付近から、大型ショッピングセンターやビル群を背にして撮影されたものだ。それゆえ、リールの街に集う人々は日々この風景と、とりわけ主景であるこの絶壁と向かい合うことになる。スイスの自然保護区にちなんでデルボランス島（L'île Derborence）と名づけられたこの人工の島は、上部に約 2500 ㎡もの広大な空間を持ちながら、周囲は全て高さ約 7 m の壁面によって取り囲まれている。初めてこの公園を訪れた人は、

---

1 Clément, 2007(1991), p.14.

植物が繁茂するこの高台でのピクニックやそこからの眺望を期待して階段を探しまわるかもしれないが、公園の案内板に記されているように、島の上部には立ち入ることさえできない。

クレマンの作品集を繙くならば、この場所ははじめにいくつか主要な植物を定植したことを除けば維持管理もされておらず、年に二回行われる植生調査を除けば誰も立ち入っていないことが分かる。つまり、デルボランス島はその上部に空き地（terrain vague）や放棄地（délaissé）のようなものを抱え、公共空間特有のアメニティとも関係なく、植物に占拠されるがままになっているのである。しかしながら、都市が、人間から入念に切り離されたこの空間を受け入れるのは困難だろう。事実、荒れ地の出現に抗議する周辺住民からの圧力によって、リールの市長はデルボランス島を「視覚的汚染」と形容し、撤去を企てることになる[2]。

こうした抵抗は、国際造園家連盟[3]の態度とも足並みをそろえるものだろう。クレマンが指摘したとおり、連盟は打ち捨てられ、植物が繁茂した「産業による荒れ地と危機に瀕した風景とを同列に置いている」のであり、「このことは自然による土地の奪還を、荒廃として告発することに等しい」[4]。つまりデルボランス島に展開している人間から切り離された空き地、あるいは放棄地とは危機に直面しているとみなされるのであり、評価の対象であるよりは、むしろ美化の対象になる。

こうした傾向の一般性は、安西信一の次の指摘からも明らかだ。「現在、このランドスケープ・アーキテクチャーは［…］全世界を覆い尽くそうとしているかに見える。極端化が許されるならば、今や地球全体が一つの〈開かれた庭〉となることが目論まれているのである」[5]。世界の庭園化。それはこれまでの庭やランドスケープ・デザインの欲望そのものであり、デルボランス島を視覚的汚染として告発し、撤去しようとする発想とも共通した欲望なのではないだろうか。それはつまり、*人間から切り離されたために荒廃した風景を美化し、庭園化しようとする欲望*なのだ。

では、クレマンはどのような意図をもって、都市の中心にデルボランス島を挿入したのか。そこでは人間なしでつくられる庭が目指されているのだろうか。クレマンの意図を明確にするには、世界の庭園化に抗する、彼の思考と実践をたど

---

2 Clément and Jones, 2006, p.145. また、個人的なインタビューのなかで、クレマンは市民がこの絶壁を覆い隠すために、何本かの樹木を壁に沿って定植したと語っている。

3 I.F.L.A.: International Federation of Landscape Architects

4 Clément, 2007(1991), pp.16-17.

5 安西, 2000, pp.243-244.

ってみる必要がある。

1．都市と空き地——第三風景

《アンリ・マティス公園》がさまざまな批判を招くのは、この公園が、都市にたいする批判的態度を内包しているからだろう。なぜなら、デルボランス島はクレマンの規定に従えば「庭に統合された放棄地」なのであり[6]、都市の論理で言えば、放棄地を導入することは死んだ土地を導入することと同義なのである。ところがこの島は、ジュゼッペ・マリノーニが述べるとおり、「「空き地」の本質的価値の認識とその地位の向上」を狙っているのであって[7]、クレマンはこうした土地の数々を、〈第三風景（Tiers-paysage）〉という特異な概念によって積極的に位置づけようとしている。

> 〈第三風景〉［…］とは、人間が風景の進化を自然だけにゆだねた空間の全体を指し示す。また〈第三風景〉は、都市や田舎の放棄地、移行部の空間、荒れ地、沼地、荒野、泥炭地に関わっているが、道端、河岸、鉄道線路の土手などにも関係している…。あらゆる放棄地は保護された領域に加わろうとする。事実上の保護区——近寄れない場所、山頂、未開拓地、砂漠。制度的な保護区——国立公園、地方の公園、「自然環境保全地域」[8]

きわめて多義的な概念である。クレマンによれば、わたしたちが日常目にするような、放棄され、雑草に覆われたような土地、つまり国際造園家連盟が「危機に瀕した風景」と同一視した土地の数々が〈第三風景〉と呼ばれる。そしてクレマンはさらに、これら〈第三風景〉を自然保護区などと同列に扱う。というのも、たとえば耕作放棄地は雑草をはじめとするあらゆる種の植物が繁茂することができるが、これは人の手が行き届いた耕作地に比べて多様性が高いことを意味するからだ[9]。

とはいえ、地球規模の環境破壊が問題化した 20 世紀後半以降、生物学的観点から公園や庭を捉え直す試みは珍しくない[10]。しかし〈第三風景〉という評価軸

---

6 Clément and Jones, 2006, p.145.
7 Marinoni, 2004, p.113.
8 Clément and Jones, 2006, p.23.
9「人間の制御と開発に従属したすべての領域と比べるなら、〈第三風景〉は生物多様性を受け入れる特権的な空間を構成しているのである」（Clément and Jones, 2006, p.23）。

が際立っているのは、空き地や放棄地、あるいは荒れ地などという、かつての観点では美化や庭園化の対象だった空間を積極的に捉え直し、制度的な保護区と同列に扱おうとする点だろう。そもそもデルボランスという名は、ヨーロッパにごく僅かしか残されていない原生林、スイスのデルボランス自然保護区に由来している。

人間を寄せつけず、植物が自由に繁茂するデルボランス島は、それゆえ〈第三風景〉の断片と呼ばれる。この島が不可侵の空き地の重要性を示唆することで、都市への批判を表明しているとすれば、人間によってつくられる都市にたいして、人間なしでつくられる空き地をつきつけるからであるように思われる。そうだとすれば、デルボランス島はマリノーニが評したように、「手つかずの自然（natura inviolata）の理念を表象している」ことになるだろうし[11]、ここでの焦点は、人間によってつくられるのか、人間なしでつくられるのかという対立関係になってしまう。しかしここでは、クレマンの狙いをいっそう明確にするために、本論の冒頭に掲げた問いかけが収められた『動いている庭』序論の文脈を今しばらく追ってみよう。

> 道端で誰がつくったのでもない庭に出会うことがある。自然が庭をつくったのだ。そうした庭は野生のものに見えないにもかかわらず、野生のものである。ひとつの手がかり、特徴的な花、鮮やかな色彩のために、それらの庭はもはやたんなる風景ではなくなっている[12]

ここでも冒頭の問いかけと同様に、人間ではないもの、つまり自然が強調されている。それは具体的には、ソローニュ地方のコナラ林が切り開かれた跡地に見いだされた緋色のジギタリスの群生であり、ギリシアのパロス島に見られる、乾いた熱風を避けて低く這っているゼニアオイやカミツレモドキ、ヒナゲシであり、あるいはニュージーランドで雌牛が食べ残すために群生している白いアラムの野原である[13]。

こうした誰がつくったのでもない庭は、単純に自然がつくったと記されているが、ここで言われる自然の内実はきわめて込み入っている。たしかにこれらの風

10　こうした評価軸への関心は、1996 年にフランスのモンブリゾンで行われたシンポジウム、『風景の進化と表象』でも確認されている（Corbin and Lebrun, 2001, pp.170-171 (pp.168-170)）。

11　Marinoni, 2004, p.117.

12　Clément, 2007(1991), p.13.

13　Clément, 2007(1991), p.13.

景では、植物が土地を覆う姿を風や雌牛がつくりだしているし、言うまでもなく、植物固有の成長や土壌の質、またその土地の気温や湿度の影響が大きい。しかしそうだとしても、ジキタリスの群生は人間がコナラ林を切り開いたことで可能となったのだし、これらの風景が庭になるのは、たいていは人間が持ち込む外来種の「特徴的な花」や「鮮やかな色彩」に彩られるからである[14]。

そうだとすると、クレマンが言うところの自然とは、人間なしの「手つかずの自然」というよりは、人間を含む諸存在の集合体として考えなければならない。意図しなくとも、人間の行為は大雨や日照りのように土地の状況を変化させ、植生を変化させる。同じように外来種の種子は人間が意図的に持ち込むこともあれば、衣服に付着していることもあるが、それにしても風に乗り、鳥に食べられることで移動する種子と同様、風景を変えてしまう。こうして野生の風景は人知れず新しい風景へと、つまり誰がつくったのでもない庭へと変貌する。

それゆえ、人間がつくるか、自然がつくるかという対立そのものは問題ではなく、人間と自然との境界を問い直すことが重要なのだ。冒頭の問いかけは、新しい庭が人間なしでつくられるかどうかに力点があるのではない。むしろ人間が関与していないはずの空間に人間の痕跡を見いだすことで、庭が人間と他の諸存在の集合体によってつくられていることへと焦点化する狙いがある。

人間と他の諸存在の集合体。これはクレマンの語彙にしたがえば、「生きているもの（vivant）」と呼ばれる。

> わたしが言うところの生きているものとは、多様な自然と数多くの人類を同時に含んでいる。庭は「自然」の創造性に「人間」の技を組み合わせる[15]

こうした思考は、その定義のなかに放棄地、道端、河岸、鉄道線路の土手をも含む〈第三風景〉にも当てはまるだろう。そしてクレマンの庭において、人間と自然は、理念的には同等の基準で捉えられることになる。つまりここでは人間の都市と自然の空き地という区別は重要ではない。デルボランス島が都市にたいする批判的態度を内包しているとすれば、それはこの島が、都市と空き地の本質的等価性を示しているからではないだろうか。もはや空き地は庭園化や美化の対象

14「地元の人に、誰がこれらの花々を植えたのかと尋ねても、誰も知らない。そして花はずっとそこにあったという。ずっと？ だとすれば、どうしてメキシコ原産のキンレンカがニュージーランドにあるのだろう？ アフリカのアラムやインドのカンナが、アフリカやインド以外の場所で、まるで生来の地であるかのように成長している…」（Clément, 2007(1991), p.14）。

15 Clément and Jones, 2006, p.11.

ではない。

２．時空間の堆積——動いている庭

それでは、「生きているもの」が庭をつくる、というクレマンの着想はどのような帰結を庭へともたらすのだろうか。まず空き地とは、植物の運動、移動が自由に行われている空間だということが分かる。それにたいして、庭園空間は伝統的に、一定のイメージのもとにデザインされ、管理されてきた。しかし当然のことながら庭に内属する植物は、こうした意図とは関わりなく、つねに成長し、変化する。このため、人間とは無関係に成長する植物をどう扱うかはつねに庭が抱える課題だったと考えられる。

ジャック・ブノワ＝メシャンは、フランスの庭園にパースペクティヴが持ち込まれたとき、はじめて人間の意志が自然の気まぐれ（caprices de la nature）に打ち克ち、同時にたんなる庭師（jardiniers）から庭園建築家（architectes de jardins）への移行が生じた、と指摘している[16]。またベルナール・ラスは、ランドスケープの仕事を園芸家（horticulturist）の平凡な仕事から識別する特徴として、彫刻的次元を挙げる[17]。つまりここでは庭のプランを建築的、彫刻的水準から決定する庭園建築家や、景観建築家と訳出しうるランドスケープ・アーキテクトと、自然の気まぐれの管理にいそしむ園芸家や庭師が決定的に対立させられているのだ。こうした整理はあまりに図式的かもしれないが、クレマンの立場を決定する上では重要な参照項になる。なぜなら、クレマンは自らのことをランドスケープ・アーキテクトとは呼ばず、意識的に庭師と呼んでいるからだ。

クレマンは、「いかなる庭園もいかなる風景も、それらが存在しているあいだは常に変化しており、決してそこから逃れることができない」[18]という着想にもとづき、自然の気まぐれ、つまり植物の絶えざる変化を庭の本質と捉え、〈動いている庭（jardin en mouvement)〉という概念を生み出すことになる。

〈動いている庭〉がこれまでの庭と根本的に異なる点を二点に集約すると、第一に空間的観点での変化、つまり庭の植物が転々と移動し、刻々と変化する植物群落の形態が庭のプランを変形させてしまう点であり、第二に時間的観点での変化、つまり第一の空間的な観点での変化が、実は庭における時間の捉え方をまったく新しいかたちで提示している点である。

---

16 Benoist-Méchin, 1975, p.171 (pp.156-157).
17 Roger, 2001, p.142.
18 Clément and Jones, 2006, p.11.

まず第一の空間的な変化についてだが、植物が成長して伸びるということではなく、字義通りに移動し、庭が動いているということは、にわかに信じられないかもしれない。しかし、数年単位で観察を続ければ、植物は種子を落とし、あるいは地下茎を張り巡らせることで、年々少しずつ移動していることが分かる[19]。植物は種に固有の傾向、たとえば乾湿の過剰や日陰を避け、周囲の別の植物との関係によって動き、結果的に自らにとって有利な環境へと広がっていく。このとき、植物は移動し、群落を形成し、ときに消滅するのだが、この動きが活発になると、当然のことながら庭のプランが持っている形態をも浸食することになる。

> 園路に偶然芽を出す花々は、庭師をある選択に直面させる。つまり園路を維持するのか、花々を保存するのかという選択に。〈動いている庭〉はその場所を選んだ種の保存を勧める。こうした原理の数々は、庭の型にはまった着想を一変させてしまう[20]

園路とは、庭のプランからすれば、まさに庭の骨格を成すものであり、偶然に芽吹く花に比べれば遥かに重要な要素である。それゆえ、もしこの一節で言われているように、芽吹いた花を園路に残そうと思えば、季節ごとに園路を迂回させなければならず、庭のプランは植物の移動との関係でつねに変更を余儀なくさせられるだろう。しかし前節で確認したように、クレマンが提起する庭が人間と人間以外の諸存在との集合体、つまり「生きているもの」によってつくられる以上、〈動いている庭〉では、園路とその途上に芽吹いた花とは同等のものとして検討されなければならならない。そしてこのことが、これまでの庭と〈動いている庭〉を隔てる第一の特徴なのである。

庭師とは、一般的には自然のきまぐれを押さえ込む者、つまり落ち葉や雑草の駆逐、花壇の囲い込み、木々の剪定や刈り込みをとおして、庭のプランを保存する者だろう。そしてこのように理解するならば、人間と人間以外の諸存在の関係は非対称になる。しかし庭のプラン自体が「生きているもの」によってつくられると捉えるならば、庭師とは、諸存在の相互作用を解釈する者になる[21]。この意味での庭師は、庭が本質的に抱えている過剰な動きを積極的に活用し、庭のプランを保存するのではなく、更新していく者になる。

---

19 「〈動いている庭〉の最も印象的な現れのひとつは、種が土地を転々とする仕方である。ある急速な、驚くべき運動は、短い周期の草本種［…］、つまり一年草あるいは二年草の運動である」（Rocca(ed.), 2007, p.216）。

20 Clément and Jones, 2006, p.19.

21 Clément and Jones, 2006, p.18.

クレマンは植物や土壌、水の流れといった人間以外の諸存在が庭の形態に参与する力を認めているため、まるで人間から切り離された自然を重視しているように思われるかもしれない。しかし庭のなかで動いているものとは、植物だけではなく、人間をも含んでいる。〈動いている庭〉の園路は、道の途上に咲いた花との関係でつくられるが、庭には人々が草地を行き交った跡が小径として残されてもいる。この小径に沿って草を刈りとるならば、不意に咲いた花を避けるのとは異なる論理に属した園路が生起することになる【図 2】。この園路はすべての草が枯れる冬には消えてしまうのだから、毎年異なる経路で異なる曲線を描く小径がつくられる。つまり〈動いている庭〉の狙いは、「生きているもの」を構成する諸存在相互の新しい関係の仕方を空間的、形態的に感覚できるものとして実現することにある。

さて、こうした空間的、形態的な観点での変化から、第二点の時間的観点での変化が帰結する。たしかに園路の途上に芽吹いた花を、そこが園路だからといって刈りとることは、庭のプランの空間的観点での保存にすぎない。しかしながら、動きがつねに空間と時間の結節点にあることから分かるとおり、空間の管理は暗黙の内に、時間の管理を含んでいる。この点が想像しづらいのは、庭では季節ごとに下草が芽吹き、花が咲き、落葉樹が紅葉するため、季節ごとの時間的変化があるかのように見えるからだ。しかし空間的に管理された庭では、季節ごとに循環する時間はあっても、より大きな尺度での時間はない。つまりここには植物が移動し、遷移することを可能にするような、堆積する時間が欠けている。

植物の動きの管理は、空間的に見れば、庭をプランにもとづき保存するためになされる。しかしたとえば、園路脇の寄せ植えにあった植物が園路の中央に芽吹くためには、つまり植物が空間的な変化を引き起こすためには、まずその植物が定植されて種子を落としてから、発芽して花を咲かせるまでの時間の堆積を必要とする。それゆえ、空間的観点からこの花を駆除することは、実のところ庭に堆積する時間を毎年消去し、循環する時間に還元することに他ならない。つまり空間の管理は、暗黙の内にではあれ直接時間に介入し、管理しているのだ。

こうしてクレマンは、これまで注目されることの少なかった庭の時間的側面を最大限に評価した。庭における時間は、保存や修復など、人間の歴史的時間の観点からはしばしば検討されてきた。しかしながら、〈動いている庭〉の空間的な変化を仔細に検討するならば、人間以外の諸存在にも、反復しえない、堆積する時間があることが分かってくる。そしてこれこそがこれまでの庭と〈動いている庭〉を隔てる第二の特徴なのである。

植物の動きにしたがって園路をつくり直し、庭を更新し続ける作業は、これまでの庭の管理とは非常に異なるため、ここには新しい管理の問題が出現する。た

しかに、〈動いている庭〉の管理も庭の形態的、空間的な管理のひとつの手段に過ぎない。この意味ではこれまでの管理と同じもの、あるいはより巧妙な管理でしかない、ということも可能だろう。しかし〈動いている庭〉の管理は、時間を反復に還元するのではなく、時間の堆積をいっそう感覚できるようにするためになされる。こうして時間を感覚可能なものへともたらす作業をとおしてはじめて、庭を訪れる人は時間と空間の堆積から生じる庭の動きを認識できるようになる。

〈動いている庭〉を特徴づける上記二点の考察から、クレマンが動いているという形容に仮託しているものが、空間的、形態的な動きや変化の積み重ねだけではなく、堆積する時間をも意味していることが分かる。時間か空間かの一方だけでは成り立たないような、こうした堆積を、ここでは時空間の堆積と呼んでおく。植物の時空間の堆積は、それを際立たせる管理によって、人間の時空間のなかへと組み込まれ、〈動いている庭〉となっていく。こうしてクレマンは、人間と人間以外の諸存在との集合体である「生きているもの」の時空間を相互に組み込み、これまで見えなかった人間以外の諸存在の時空間の堆積を、植物の動きによって、つまりきわめて庭に固有の方法で感覚できるようにするのだ。

3．攪拌と指標——惑星の庭

これまで強調してきたように、ジル・クレマンの思考が、人間と他の諸存在との新しい関係の仕方を探求しているとすれば、極端なエコロジー運動に見られるような、人間と切り離された自然を保存、再現する諸運動とは慎重に区別されなければならないだろうし、アラン・ロジェが注意を喚起しているように、生物種の秩序や固有性、純粋性を引き合いに出すことで外来種を駆逐し、固有種を保存しようとする思想とも区別されなければならない[22]。こうした動向は、庭園空間を保存し、堆積する時間を消去している伝統的な庭師の形象ときわめて類似している。なにものかを保存するという発想は、種の移動、異種相互の雑種化、固有種と外来種の雑居性によってつくられてきた自然の歴史を否認し続けている[23]。

これに対してクレマンの思考は種の交雑から、彼の言葉で言えば惑星規模の攪拌（brassage planétaire）から開始される。クレマンはフランス中央部、クルーズの自邸の庭に隣接した《野原（Le Champ）》と呼ばれる広さ約 7000 ㎡の放棄地に様々な植物の種子を蒔き、植生遷移を長期的に観察している【図 3】。この観察の

22 Roger, 2001, pp.88-89.
23 惑星規模の攪拌は生命力に差がある種相互の競合によって種の多様性を脅かすが、種の新たな振る舞いや新しい風景、ときには新たな種をももたらす（Clément and Jones, 2006, p.21）。

なかでクレマンは、周囲 50km 以内には存在しないカーネーションの一種が突然もたらされた驚きについて報告している。不意に、そして偶然に攪拌は開始され、新しい風景が生起する。この攪拌がいかなる経路で可能になったのか、つまり人間によってか、他の諸存在によってなのかを厳密に区別することは困難だろう。本質的に、攪拌の歴史には人間の活動が含まれているからだ。

> 人間は旅をしてきた。植物とともに。この巨大な攪拌によって、長きにわたって隔てられてきた諸大陸の花々が出会い、新しい風景が誕生する[24]

人間は、これまでつねに遠い異国の植物と結びつき、庭や風景を多様化してきた。とりわけ庭が、歴史的に遠い異国の地から持ち帰った希少植物の備蓄場であり、異種配合や品種改良を担った実験室だったことを思い起こすなら、攪拌とは庭の本質に属する事柄なのである。とりわけ現在、この種の攪拌現象は人間が惑星規模で加速させているが、攪拌の可能性そのものは、風や海、鳥や虫、さらには人間を使った種の移動能力そのものに内在している。そのため極端なエコロジー運動のように固有種の楽園である「手つかずの自然」を想定しても、惑星規模の攪拌を押しとどめることはできない。〈第三風景〉や〈動いている庭〉と同じように、ここでも人間の時空間だけ、あるいは他の諸存在の時空間だけが問題なのではなく、両者の新しい関係の仕方こそが問われなければならないのである。

プロヴァンスの地中海沿岸のレイヨルで、1989 年から開始されたプロジェクト、《レイヨルの領地（Domaine du Rayol）》は、クレマンが手がけた公共の庭としてはごく初期のものだ。ここには地中海性気候区に属する南アフリカ、ニュージーランド、チリ、オーストラリア、アメリカ、スペイン、中国などの特定地域に属する植物群が集積され、文字通り攪拌が実現されている【図 4】。この庭はあらかじめ植生の惑星規模の攪拌が実現されているが、それが可能であるのは、すでに指摘したとおり、それぞれの種自体が攪拌への傾向を持っているからである。

ところで、この庭は視覚的類似による世界中の風景や植生の模倣を目的としているのではなく、むしろ博物学的な方法論にもとづくアーカイヴを形成することを目的としている。とはいえ、気候区の同一性にもとづいた種の移動と攪拌を示すことに力点があるために、植物園とはまったく異なるものだろう。ここでは世界の植生体系から借用されたさまざまな植物が、地中海性気候区や、世界各地の植生分布にもとづいた惑星規模の動きを指し示す、惑星の指標（index planétaire）へと変換されている[25]。

---

24 Clément, 2007(1991), p.14.
25 Clément and Jones, 2006, p.152.

> 伝統的な意味では、庭は惑星規模の撹拌の特権的な場所である。世界の隅々からやってくる種の数々によって否応なく飾られる個々の庭は、惑星の指標とみなすことができる[26]

こうした観点から、クレマンは〈惑星の庭（Jardin planétaire）〉という概念を提出した。この概念は〈動いている庭〉に続いて提出された主要概念であり、〈第三風景〉に発展する重要な媒介項である。〈動いている庭〉が「生きているもの」の動きによって時空間の堆積を可視化したように、〈惑星の庭〉は庭を惑星の指標として、惑星規模の種の動きを可視化する。

クレマンの指摘によれば、そもそも庭（jardin）とは語源的に囲われた土地（garten）を意味しており[27]、同じように、地球における生物圏もまた有限であり、その意味で囲われた土地だろう。この観点から見れば、惑星と庭は類比的に閉ざされた庭である。そのため個別の庭は惑星の生態系が集約された指標と考えることが可能であり、同時にこの惑星は広大な庭として表象される[28]。

《レイヨルの領地》が視覚的類似にしたがった模倣ではなく、生態学的なアーカイヴであることからも分かるとおり、こうした考え方は庭の特性を生態学的な環境に限定してしまうようにも思われる。そのように考えるなら、庭とはエコロジー運動の拠点でしかないだろう。また〈惑星の庭〉は、地球を閉ざされた庭としてとらえ、限りある生態系を意識化し、個々の庭を生態系の表出として捉えることに過ぎないのだとすれば、ロジェが言うように、庭はたんなる心的な態度に還元されてしまっている。ロジェは〈惑星の庭〉を続けて次のように批判する。つまりこの庭は、客観的な生態学的事実にのみもとづき、文化的な次元を欠くため、世界中にある個々の地方の庭、たとえば京都の竜安寺やグラナダのフェネラリーフェ宮殿のような美的次元が存在しない…[29]。

しかしながら、この批判には疑問が残る。たしかにクレマンは〈惑星の庭〉を生態学的観点から捉えている。しかし生態学的事実にもとづくことが、文化的、美的観点の欠落を意味するとも言ってはいない。生態学的事実と文化的、美的次元は同時に生起することができないのだろうか。この分割は、デルボランス島を視覚的汚染として攻撃し、世界を庭園化しようとする態度を想起させる。そしてロジェが「地方の庭／惑星の庭という二元性に、風景／環境という他の対立がと

---

26 Clément and Jones, 2006, p.21.

27 Clément and Jones, 2006, p.20.

28 「〈惑星の庭〉はこの惑星を庭として表象する。生態学的な有限性の感情は、生物圏の限界を、生きているものの囲いとしてあらわす」（Clément, 2004, p.10）。

29 Roger, 2001, p.87.

って代わる」[30]と規定する背景には、人間にとっての文化的で美的な風景と、人間以外の諸存在にとっての生態学的な環境を二分する思考が隠されているように思われる。

しかし先の引用にもあるとおり、惑星規模で撹拌された生態学的な環境のなかにクレマンが見いだすのは、新しい風景なのである。つまり惑星規模の撹拌は、実際の風景をつくりかえることで、生態学的事実と同時に美的次元にも作用している。〈動いている庭〉では、植物は生態学的環境にしたがって移動することで、時間的堆積という感覚できないものを形態として可視化していた。同様に〈惑星の庭〉においても、植物はより遠くへと移動し、あるいは人間によって移送されることで、惑星規模の撹拌という感覚できないものを風景や庭のなかへと、つまりロジェが言う意味での文化的次元へともたらす。

そして、〈惑星の庭〉を心的な態度としてのみ考えることもまた、この概念の片面しか説明していない。《レイヨルの領地》は、具体的な植物とその撹拌、それを可能にしている地中海性気候区の特性、土壌や日照の条件など、具体的な実在の数々の結合をとおして、惑星規模のなにものかを指し示している。〈惑星の庭〉とは、まさしく「生きているもの」によってつくられた現実的な結びつきなのである。惑星規模の撹拌が引き起こす風景の突然の変化とその驚きは、新しい風景や庭との出会いをもたらす。ここでは、ロジェの言う生態学的事実と美的次元は密接に関わり合っており、区別することは困難だろう。クレマンは生態学的でもあり、同時に美的でもある変化や驚きを庭において可視化し、実現することを目指している。

結びにかえて――準庭園の思考

最後に、再びデルボランス島へと立ち戻ろう。本論冒頭では、都市の、しかもプロジェクトの核心部に、こうした無為の土地を挿入することは奇妙な行為のように思えた。しかし、クレマンの庭とその思考を検討してきたことで、この場所の意図が少しは明らかになったのではないだろうか。

〈第三風景〉の断片として、この島は都市にたいして空き地の重要性を突きつけていた。そこは多様性の保存場であり、こうした種の雑居性のなかから新しい風景が生成される。また〈動いている庭〉の観点から言えば、わたしたちは空間を管理することで、同時に時間を消去していた。デルボランス島は、こうした管理を完全に拒否することで、きわめて先鋭的に「生きているもの」の

30 Roger, 2001, p.88.

時空間的な堆積を表現している。また〈惑星の庭〉の観点から考えるならば、この空き地は種の攪拌にたいして開かれた場所でもある。それゆえこの島には鳥や動物、あるいは風など、さまざまな経路から新しい種が自由にもたらされる。

こうしたクレマンの一連の着想の源泉は、基本的に空き地や放棄地などの観察に由来する。このことは、クレマンの思考が、つねに庭と庭でないものを分け隔てる境界線上で行われてきたことを意味しているだろう。この傾向は、クレマンの庭にたいする次のような態度が強く関与している。

> 公共のプロジェクトの確信に満ちた製作態度には、今でも絶えず驚かされる。所定の用途に定められた空間のリスト、すなわち子供たちの遊具の基準、歩道の幅…などなど。発見することの単純な喜び、庭のなかで、なにがそれよりも有効なのか [31]

ここでクレマンは、庭の本質を庭の構造や規則に結びつけることなく、なにものかの発見という単純な事実に見ている。これまで検討してきたように、発見とは、動きや攪拌によって偶然もたらされる植物や、その植物が芽吹くことで生じる場所の変化であり、それはクレマンの発想にしたがえば、美的であり、かつ生態学的なものでもあった。

それにしてもこうしてどこからともなく侵入し、自然風景を庭へと変化させ、庭を動かし、惑星規模のなにものかを指し示す植物はどこからやってくるのだろう。《アンリ・マティス公園》にデルボランス島を挿入したのは、まさにこうした種を受けいれる自由な空間を創出するためだろう。しかしこの土地は同時に異なる土地へと種を転送するための中継地の役割を果たしてもいる。このように考えるなら、クレマンの庭に侵入し、人々に驚きを与える植物は、また別の空き地や放棄地、つまり各地に散らばる幾多の〈第三風景〉のなかに存在しており、デルボランス島もそのうちのひとつなのである。

たしかに〈第三風景〉とは、それ自体は庭ではない。しかしそれは、やがては庭になるべく待ち構えており、あるいはすでに庭から逃げ出してきた、放浪する植物群が形成する風景だろう。この意味で〈第三風景〉とは、都市のあらゆる場所に散在する準庭園なのである。つまり植物の動きや攪拌を加速させ、偶然に満ちた発見と喜びを生成するための庭のインフラなのだ。それゆえデルボランス島

31 Clément and Jones, 2006, p.15.

は、クレマンが言うとおり、《アンリ・マティス公園》にとっての母型（matrice）そのものなのである[32]。

〈第三風景〉は、都市の論理では直ちに庭園化されるべき対象かもしれない。しかしながら、この準庭園が庭へと昇格することはない。というのも、〈第三風景〉は特定の場所を指示する言葉ではなく、放浪する植物のネットワークそのものだからだ。ネットワークとしての準庭園は、それゆえその内のいずれかを整備しようとも、どこか遠くのビルの跡地や産業跡地、開発の止まった造成地や新しい鉄道の脇などに移るだけであり、土地が庭園化されてしまうより速く移動し、いたるところで準庭園にとどまり続け、世界の庭園化に抵抗している。

32 Clément and Jones, 2006, p.145.

［文献］

安西信一『イギリス風景式庭園の美学――〈開かれた庭〉のパラドックス』東京大学出版会、二〇〇〇年。

BENOIST-MÉCHIN, Jacques, *L'Homme et ses Jardins ou Les Métamorphoses du Paradis terrestre*, Paris, Albin Michel, 1975（河野鶴代、横山正訳『人間の庭』思索社、一九八五年）.

CLÉMENT, *Gilles, Le jardin en mouvement. De la Vallée au Champ via le parc André-Citroën et le Jardin planétaire*, Paris, Sens & Tonka, 2007(1991).

―――――, *Le jardin planétaire*, Paris, Albin Michel, 1999.

―――――, *Manifeste du Tiers paysage*, Paris, Sujet/Objet, 2004.

CLÉMENT, Gilles and JONES, Louisa, *Gilles Clément. Une écologie humaniste*, Genève, Aubanel, 2006.

CORBIN, Alain and LEBRUN, Jean, *L'homme dans le paysage*, Paris, Textuel, 2001（小倉孝誠訳『風景と人間』藤原書店、二〇〇二年）.

MARINONI, Giuseppe, «Parc Henri Matisse, Lille, 1996-2000», in *Lotus international*, n°122, 2004, pp.112-117.

ROCCA, Alessandro (ed.), *Gilles Clément. Nove giardini Planetari*, Milano, 22publishing, 2007.

ROGER, Alain, « Dal giardino in movimento al giardino planetario », in *Lotus navigator*, n°2, apr. 2001, pp.70-89.

多木陽介「生命に学ぶ庭師――ジル・クレマンの思想と実践」『AXIS』第一四二巻、一二月号、二〇〇九年、一二〇―一二五頁。

［図版］

【図 1】中央壁面と上部の植物群が《アンリ・マティス公園》の主景、デルボランス島。

【図 2】《アンリ・マティス公園》の人が踏みならした跡に沿って草を刈りとった園路。

【図 3】《野原》の植生。さまざまな種の混淆。
クレマンはこの場所で昆虫の観察なども行っている。

【図 4】《レイヨルの領地》の指標としての植物群。